

■松岡二十世 農民・労働運動家。北海道で活動するうち、弾圧を受けて満州に渡り、〈敗戦〉でシベリアに抑留され、没した。

まつおかはたよ
田中正造直訴1901= 宮城県登米町で、仙台藩の支藩登米藩で代々祐筆をつとめた家柄の漢籍の素養深い松岡陳平の三男に生まれ、20世紀驍頭ということから、希望と期待をこめて、二十世と名付けられる。

登米町では高等教育一家で知られた家庭で、_何不自由なく育ち、

日露戦争終・1905= 4歳：

伊藤博文暗殺1909= 8歳：現在も国指定重要文化財として残る登米尋常小学校に入学、
韓国併合・・・1910= 9歳：

明治天皇没・1912=11歳：

尋常科6年、

高等科2年通って、

ロシア革命・1917=16歳：長兄が仙台高等工業学校を卒業して建築関係の仕事に従事。卒業し、佐沼中学校3年に編入、次兄は千葉県立高等園芸専門学校に在学中で、小学校教諭していた長姉はすでに結婚。中学で親友となった菅原達郎とともに、

ベルリン条約・1919=18歳：学制改革により、4年修了で、仙台の第二高等学校文科乙類に、2番の成績で入学。灰色の学都と感じる一方、後に、二高校長となって名校長ぶりを謳われる阿刀田令造教授に認められて、その家に入り、

大暴落・・・1920=19歳：専門学校を卒業し進学を諦めて帰郷した次兄が、全く斬新なガーデニングの事業を始める一方、
原敬首相暗殺1921=20歳：松岡家の家督相続者たる長兄が旅先の名古屋で急死、自らは、妹の親友に失恋し、二高の親友と、押川方義が設立した仙台東一番丁教会で受洗するなど、_初めて波乱に遭遇して、

水平社結成・1922=21歳：東京帝国大学法学部政治学科に進学し、同法律学科に進んだ菅原とともに、宮城県出身者のために建てられた五城寮に入る。父が、次兄のために、屋敷を抵当に入れて土地を入手し、植物園(香山園)を開いた後、母を伴って上京、東京や鎌倉を案内したのを最後の孝養に、_社会主義の嵐の中に巻き込まれて行く。

関東大震災・1923=22歳：自らの縁で、松岡家の嗣子となった次兄が阿刀田教授の末妹と結婚。友人と佐渡旅行後、_(新人会)に入って、その活動にのめり込み、

護憲三派圧勝1924=23歳：妹が結婚。_(新人会)最盛期の小樽行きで、小林多喜二「轉形期の人々」の中の一人として描写され、
治安維持法・1925=24歳：卒業後、就職せずに大学院に在籍し、_大山郁夫らの「政治研究会」メンバーとして活動に励み、{問題社}が旭川で開催した「青年夏期学校」の講師に招かれるなどして、農民運動指向、北海道指向となり、松岡家は一家で「香山園」へ転居、祖父が死去し、次兄が家督相続などする間、

円本時代始・1926=25歳：「香山園」で一夜を過ごし、札幌の「_北海タイムズ」記者になるも、すぐに辞職、全国組合北海道聯合会(全農北聯)に創設された月形支部の書記に任じられる。

金融恐慌・・・1927=26歳：恩師大内兵衛の示唆により3年来進めてきた、*エンゲルスの「ドイツ農民戦争」を翻訳刊行して、確信。全農北聯で教育部長に選任され、前年に始まった磯野農場小作争議に対応、{北海タイムズ}でも大々的に報道して世論を喚起し劇的效果があり、調停後、同志の姉で、月形村小作争議で活躍中の石田よい子と結婚。自らも指導を始めるが、検挙される。正式裁判を請求すると保釈され、現場復帰、

共産党事件・1928=27歳：争議第二幕は和解で幕引きとなるが、三・一五事件で検挙され、懲役三年の判決で、網走刑務所に入獄、
海軍軍縮条約1930=29歳：妻よい子は苦勞の末、{香山園}に転がりこむも、直後に{香山園}が破産、一家はその日暮らしに。獄中で、腸チフスに罹り危篤、一家がかけつけ、刑も一時停止される。妻の看護もあって回復し、刑は続行され、

満州事変・・・1931=30歳：次兄がようやく北海道庁に職を得、一家は移住するも、登庁拒否され、以後も特高が監視、父陳平はついに豊平川に投身自殺。

五一五事件・1932=31歳：_出獄して、月形村で静養した後、妻とともに旭川に戻る。不況と凶作に苦しみ、雨竜争議の惨敗によってどん底となった全農北聯を見捨てることができず、書記に復帰、この間、多喜二の「不在地主」を読むも最後の「戦ひ」4章が削除されていて、物足りなさを感じている。次兄は石田家に支えられ、園芸を教えるなどして、月形村民に慕われる。長女の誕生で正式に婚姻届。

国際連盟脱退1933=32歳：小林多喜二が築地署で拷問虐殺される。_佐野学に始まる転向に、全道農民に檄を飛ばすも空しく、
帝人疑獄事件1934=33歳：_「非転向」"甲号特別要視察人"として、北海道庁特高課の厳重監視のなか、全農北聯執行委員長に選ばれ、
芥川直木賞始1935=34歳：長男が誕生。*全農北聯の全農総本部復帰を実現。書き手としても復活し、全協事件に連座して検挙され、処分保留で釈放中に、当然慎重な言い回しで、雑誌「社会評論」に「学生運動秘話」を、{労働雑誌}に「農民運動家からみた労働運動」を執筆。

二二六事件・1936=35歳：_北海道無産団体協議会を設立し、全農北聯書記長となって、全農創立十五執周年記念大会に出席、
日中戦争始・1937=36歳：_全農道民協議会を開催、門屋博の勧めで、{新評論}に初めての時代考察的政治経済論文「大土地所有制度の行方」を執筆、続いて近衛内閣の登壇に、「新内閣と土地政策の展望」を寄稿、社大党全国大会に出席するが、人民戦線事件によって、ついに農民運動も終りを迎え、

健保+総動員 1938=37歳：{新評論}に三つの論文を寄稿。_全農北聯拡大委員会が最後の会となり、第二次人民戦線事件後、全国農民組合は一夜にして大日本農民組合にとなり、その北海道聯合会主事となるも矛盾、ついに居場所を失い、

第二次大戦始1939=39歳：松山家として妹を義絶し、妻が肺患となって結核療養所入りして家族も四散するなど、*失意のなか、北海道に別れを告げて上京。国民思想研究所所員となり、知識や情報の宝庫に眼を開かせられて、機関誌「国民思想」に本格的論文「最近の国際情勢展望」はじめ多くの書評や経済論文を執筆、さらに編集発行兼印刷人まで務め、有力誌「政界往来」に「コミンテルンの新動向」を寄稿、政治経済研究会では「戦時物価問題の現在及将来」を執筆、さらに「日本農業転換の基礎」「日本経済原理の探究」を目指すうち、たまたま関東労務協会調査部長職のオファーがあり、

大政翼賛会・1940=40歳：次兄の死去の報に、松岡家最後の男子として決断、妹や妻と再会し、_満州国大連に渡る。満州や関東の労働問題に取組み、論考「満州労力問題の将来」をまとめた後、

日米開戦・・・1941=40歳：一時内地に戻って妻子を大連に迎え、_再スタートした満州国協和会囑託を経て、正式に中央本部員調査部参事となり、{協和運動}の建国十周年記念号の編集責任者になったほか、各種会議の司会役を務め、

・・・1942=41歳：関東憲兵隊による満鉄調査部事件の関係で、初めて、家族とともに、ゆっくりした年を送り、
年金+総武装 1944=43歳：座談会司会者として「協和運動」に再登場し、機構改革で、_文化部長になるが、
敗戦・・・1945=44歳：*憲兵隊によって過去を追及されて免職となり、満州映画協会に転籍した後、敗戦となり、ソ連当局に連行されて、シベリアの収容所に送られ、

新憲法公布・1946=45歳：ノボシビルスク南方の第四五収容所から、フェルガナ盆地の第二六収容所に回され、
新憲法施行・1947=46歳：コーカンドの第三八七収容所支所から、フェルガナの本所に移動されたところで、_日本人抑留者対象の「日本新聞」で文化コンクール参加呼びかけを見ると、詩心を動かされて、長歌「農民に捧ぐるうた」を投稿、農民運動の経歴が知られ、{日本新聞}の執筆者として、極東に招致されるるが、

極東裁判判決・1948=47歳：_ハバロフスクからコムソモリスクに向かう列車内で発病、到着後、特別病院に収容されるが、シベリアで流行していた髄膜炎に罹患したらしく、日本人医師らによる治療も空しく、心不全で没した。